

子どもの社会化における父母的役割論

- 新たな父役割・母役割を目指して -

The Parental Role Theory in the Child Socialization Process

- Seeking The New Father role and Mother Role -

末吉 重人¹ — SUEYOSHI, Shigeto

沖縄国際大学非常勤講師 (社会学)

A Child Socialization is a term to refer to the process of children's inheriting norms, customs and ideologies of the society where they belong. In this process, parent's role will be the most influential factor to their children. Since Feminist theory were able to take their suitable position in the sociological field, however, that father or mother roles were criticized by them as a feudal ideology which look down a women in general. The Parental Role Theory, which I present in this paper, may modify Feminist criticism to socialization theory. For the father and mother role will be exchangeable theoretically. A father can play mother role if he wants to do so as well as vice versa. The parents can decide by themselves which role can they take according to their economic situation. In this theory, a conscience which is an internalized parent's love, a synthetic body of normative love and receptive love guides a boy/girl to the socialization instead of the super-ego.

Keywords: 子どもの社会化、基本的信頼、愛着理論、超自我、手段的役割・表出的役割、フェミニズム、フェミニスト神学、良心、

1 はじめに

社会学においては、子どもの社会化は重要な家族の機能のひとつとなっている。子どもの社会化とは、子どもが経済的・精神的に自立できるよう家庭において育てられることであるが、近年多くみられる少年に関する社会問題は、現代家族の子どもの社会化機能がうまく働かなくなったことを示している。

本稿では、家族の子どもの社会化機能において重要な役割を演ずる父役割と母役割について考察する。こうした視点は、フェミニズムが社会学において一定の地位を占めて以来、

¹ すえよし・しげと(1956年生):1978年日本福祉大学卒業。1991年6月 Unification Theological Seminary (N.Y., U.S.A.) 宗教教育学修士課程修了 (M.R.E.)、2001年3月沖縄国際大学大学院社会文化専攻課程修了 (M.S.)、2000年より現職。社会福祉士 (2012年取得)

避けて来られたものである。また近年の家族形態の多様化による家族定義の困難さの故に、定義自体が意味をなさなくなると指弾されても来た。しかし本稿はそれらの批判を受けてもなお、存続可能な父役割・母役割の構築を模索するものとする。

2 先行研究の概観

心理学の分野も含めて考えれば、父役割・母役割の研究は、オーストリアのジグムンド・フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) が発表した「超自我」(super ego) の概念を出発点とすることが出来るものと思われる。フロイトは 1923 年、超自我を「自我を社会的ルールに従わせようとする力」と定義した。超自我には、エス (イド: おおよそ性欲などの本能) に支配されようとする自我 (通常自分と思っている心の領域) を、指導する役割があるという。

フロイトは超自我を「父親のイメージ」と形容しているところから、超自我は父役割と考えられる。母役割ではなく父役割が最初に検討されたのは、フロイトの住んだヨーロッパの精神的背景が父子関係 (神-イエス) を軸とするキリスト教社会であったためであると筆者は推測している。神を男性格として理解するユダヤ・キリスト教世界において、最初に強調されるのは父親である。

母親の役割について詳細に述べるのはライフサイクル論で有名なアメリカの心理学者エリック・エリクソン (Eric・Ericson: 1902-1994) であった。彼は乳児期の心理について興味深い説を唱え、乳児は生後一年くらいを目途に「基本的信頼」(1950 年 basic trust) を形成するとした。これは、乳児と母親とが授乳を通じて築き上げるヒトを信頼する基本的な感情とされる。この感情がうまく育たないと、ヒトを信頼することができないためその乳児は成長した後、社会生活をうまく過ごせない可能性があるという。

またイギリスのジョン・ボウルビー (John Bowlby 1907-1990) は『母子関係の理論』(1958 年) においてアタッチメント (attachment) 概念を提案、人間発達における幼少期の母子関係の重要性を明らかにした。エリクソンとボウルビーが主要な母役割の分析と位置付けられる。

これらはイギリスの動物学者アドルフ・ポルトマン (Adolf Portmann, 1897-1982) が、人間は「生理的早産」(1944 年) である (動物に比べると立ち上がる時期が出産一年後であるところからそう表現した) とし「新生児に対する集団の助力、すなわち愛情をもった世話が確かなにされないと、姿勢、会話、精神生活、思考が、完全な人間性にみちびく軌道から外れていってしまう」と述べたことを前提としているものと思われる。人間は人間によって育成されなければ人間にならないことは自明が、ポルトマンは改めてそのことに注意を喚起した。

一方社会学においてはアメリカのタルコット・パーソンズをあげることができるだろう。

パーソンズは 1955 年、R・F・ベールズとの共著『家族：社会化と相互作用』において、父親が「手段的役割」（道具的役割）を母親が「表出的役割」を担うとした。

手段的役割とは、家族が外部への適応と課題遂行にかかわるもので、感情を抑える特徴があるとし、一方の「表出的役割」とは、家族集団の維持と成員の統合に関わる、感情を表に出すものであるとした。

少し意味が分かりにくいかもしれないので、これをパーソンズの AGIL と重ね合わせてみる。パーソンズは社会システムが、ある危機に見舞われたときにどのように生き残るのかについて AGIL という方式を提示した。いわば、その家族版が手段的役割、表出的役割であった。

システムは危機に際して先ず、新しい環境に適応（Adaptation）しなければならない。AGIL を国家に応用した国家モデルで考えれば「経済」が該当する。とりあえず、食べなければ生き残れないと言ったことだと筆者は理解している。次に必要なのは新たな目標（Goal-oriented）の設定である。この思考方法に、極めて西洋合理的な面があることは自明である。国家モデルでは目標設定は政治が担当する。決定を下すのは政治の役割で、ちなみに我が国の現状はこれが欠落している。

目的が設定されれば、それに向けてすべての資源を動員しなければならない。言葉を変えていえば資源の「統合」（Integrate）である。国家モデルでは法律が該当する。社会において、あるものごとは法律化されて初めて具体的に動き出す。資源の統合とは法律化を意味し、実によく考えられた対応関係だと言えるのではないか。

さて、通常だとこれで理論は完成するところだろうが、プロテスタントの環境で育ったパーソンズは、もう一步、議論を進めた。それはその新たなシステムを中長期にわたって維持するには、精神的な支えが必要だということである。それをもちろんパーソンズは宗教に求め「潜在的パターンの維持」（Latent pattern maintenance）と命名した。目標に向かって合理的に進むパターンを維持するとの意味である。宗教のみならず、学校などもその役割を担えるとパーソンズは指摘した。

この AGIL における「適応 A」と「目標設定 G」が「手段的役割」に該当する。つまり、家族の外の世界に対してアウトリーチし、とりわけ経済的資源を獲得して来る、また家族の行くべき方向を決める。これが父親の役割となることになる。手段的と訳されたが、引用文献では instrumental を道具的と訳しており、家族と外部世界とを繋ぐ媒介的役割とも解せる。

他方の表出的役割は、AGIL では「統合 I」と「潜在的パターンの維持 L」に相当する。家族がひとつになって目標に向かうこと、あるいはそれを持続させるには母親の調整能力が必要とされるということである。

パーソンズの理論はすでに触れたようにあまりにキリスト教的に過ぎるとの批判がある。ちょうど、テレビ番組の「大草原の小さな家」のような家族の在り方を想定していることは確かであろう。

3 フェミニズムによる批判

こうしたいわば、“能天気な家族論”に対してフェミニズムは辛辣な批判を展開した。家族社会学や心理学でいうところの父役割・母役割は、女性を男性の劣位に貶め、女性を家の中に閉じ込める封建的思想である、と。

フェミニストらの批判は、男女の性的役割分業批判が前提となっている。それはアメリカの人類学者ジョージ・マードック（George Murdock）が核家族こそ人類普遍的な家族形態であることを主張した『社会構造』（1949年）において、男女の性的役割分業を指摘したことに由来している。

マードックによれば男性は外で仕事を行い、女性は家内で家事・育児を行う役割分担が家族機能のひとつであるという。たしかに農耕社会において女性は避妊をしなかったため頻繁に妊娠・出産・授乳を繰り返していた。おおざっぱに言えば、健康な女性であれば2年に一回出産する。一年は妊娠し、次の一年は授乳し、三年目には再び妊娠するパターンである。その女性が屋外で農耕作業をすることは合理的でなかっただろう。必然的に男女の性別に基づく役割分業が発生した。

しかし産業化した社会においてもこうした性に基づく役割分担を継続することには問題があるかもしれない。女性の職業が高収入の家庭では、男性が家事・育児（乳児期を除いて）を行った方が合理的かもしれない。

どの分野の学問であれ、男女に固定的役割をあてがう場合、女性が男性の劣位に置かれていることがフェミニズムによって批判される。

ここで筆者のフェミニズム理解を紹介しておきたい。結論から言えば、批判半分・了解半分といったところである。了解出来る面は、フェミニズムが女性の地位向上に貢献したということである。特にセクシャルハラスメント（Sexual Harassment）やDV(Domestic Violence)の分野においてはそうであろう。何人といえども本人の了解なく女性の身体に触れ、あるいは卑猥なことを言うてはいけない。女性を単なる性の対象として見て、行動する男性は厳しく罰せられるべきである。

もちろん刑法に触れれば犯罪として処罰されるが、これまで見逃されてきたすれすれの行為は告発され、セクハラとして認知され、その行為を行った男性の社会的地位がはく奪されるようになった今日の風潮はおおいに歓迎されるべきであろう。ただしセクハラ事件では冤罪も存在するため、捜査を慎重にするべきであることは言うに及ばない。

家庭内において、妻に暴力をふるい暴言を吐く夫も罰せられるべきであろう。女性に対して、人格的存在として、自主的に対応できなかった過去の男性中心の社会には、フェミニズムの洗礼が必要であったと筆者は理解している。

しかしながらフェミニズムにも問題点がある。それはジェンダー（gender）を社会的・文化的性差として変更可能なものとし、セックス（sex）を生物学的性差として変更不可の

ものとするうちはいいものの、生物学的性差まで後天的であり変更が可能であると主張する過激なフェミニズムの登場がそれである。

「ジェンダー・フリー」との用語を使用するグループが多いこれらの過激なフェミニストは、女性への差別の源泉が学校教育において刷り込まれる（ジェンダートラック）ため、学校現場での男女の区別を廃止しようとした。混合名簿の採用、男女同じ教室での着替え、男女混合騎馬戦など、女子学生へのセクハラまがいの指導を行った。さすがにこの件は国会で取り上げられ、内閣府男女共同参画室は2005年12月27日に「ジェンダー・フリー」との用語が学校現場に混乱を招くとして使用の中止を明記した。

ちなみに性差が後天的であるとの過激な主張を行っていたグループの根拠となっていた米ジョンズ・ホプキンス大学のジョン・マナーの学説と実験は悲劇的な結末となり、その後性差が後天的であるという主張は急激に萎んでいった。

4 新たな父役割・母役割の予備的考察

父役割・母役割そのものを否定する過激なフェミニズムはともかくとして、人が健全に育つには両役割が必要であるとの見解は近年の虐待研究によって明らかになったのではないと思われる。つまり、虐待を受けた児童に発達障害様の症状が見られ、その治療には第三者による「育て直し」が有効であるとの杉山登志郎ら見解である。

フロイトの超自我、ボウルビーのアタッチメントやエリクソンの基本的信頼概念を併用し、子どもの発達をうまく概説したのは東京大学の松本茂（1933-）であった。松本は『父性的宗教、母性的宗教』（東京大学出版会 1987年）において母性的愛（子あるがままを愛する）と父性的愛（子があるべきものとして愛し導く）の概念を使いながら、子どもの成長を、母性的愛の供与→基本的信頼の獲得→父性的愛の供与→超自我の形成→社会化に向かう、として描いている。以下にその内容を説明する。

子どもは、誕生からある一定の期間、母親からの一方的な愛情を受ける。そのことによってエリクソンの基本的信頼が形成されると松本は述べている。これはボウルビーのアタッチメントの形成ともいえるだろう。

基本的信頼が形成されて後、子どもは自我が芽生えるが、それは次第に自己主張となって来る。決して自己主張は悪いものではない。むしろ自己主張は重要で、子どもが思春期に自己アイデンティティを形成する際に不可欠なものである。問題は、自己主張が他人の利害と衝突するようになった際の折り合いの付け方であろう。自己主張を通せば人間関係はうまく成立せず、一方的に自己主張を取り下げても自己の成長は阻害される。このやりとりをうまく行うことが社会化ということになる。

この社会的ルールを守ることを躰けられる段階で松本はフロイトのエディプスコンプレックスの理論を援用している。テーベ国の王エディプス（オイデプス）が父を父と知らず殺害し、母を母と知らず娶ったギリシャ神話になぞらえて、子どもが同性の親を排除

し異性の親を独占したいとする欲求をフロイトはエディプスコンプレックスと呼んだのであった。

しかし子どものこうした欲求は社会的に受け入れられず、具体的には父親の登場によって抑圧されてしまう。これが子どもにとって社会的ルールに従う初発の行為だという。その後、子どもは父親の指導によってさらに社会的ルールを学び社会化に至ることになる。

5 父母的役割論の提案

筆者が提案したい父役割、母役割とは、両者を合同して「父母的役割」と呼ぶことである。父母的役割の機能を二つに分け、母役割に相当する部分を「受容的父母役割」、父役割に相当する部分を「規範的父母役割」とする。巻末に〈図1-子どもの社会化概念図〉としてその概念図を示す。

受容的父母役割は、子どもの基本的信頼の形成、アタッチメントの形成を担う。松本が指摘するように、子どもの在るがままを受け入れ、自分の子どもであることだけで愛おしいと感じ、愛する。そのことによって子どもは将来の人間関係を結ぶ際の基本的な自己肯定感を獲得する。

通常、この時期は母親が主要なアタッチメント形成の役割を担う。しかし受容的父母役割論では、両親が協力してアタッチメントの形成を行うことになる。もちろん具体的に子ども（乳児）に接するのは母親が中心となるかもしれないが、その背後で父親は家事を手伝ったり、母親の代わりに買い物に行ったり、2時間おきの授乳で疲れた母親のマッサージなどを行うことができる。つまり、母親が万全の態勢で乳児に臨めるようバックアップする役割を担うべきであろう。

もちろん父親でも赤ちゃんをあやすのは楽しい。直接的な愛情の投入が可能である。赤ちゃんをあやせば「クー、クー」と笑顔で返事する。これがかわいくて父親はもっと面倒みたくなるだろう。しかしむずかり始めると父親の手には負えなくなることもある。

実際の子育てにおいて、よっぽど子育てに無関心な父親以外、赤ちゃんの世話や母親の支援をすることが多いのではないだろうか。筆者が経験してきた周辺はそういうパターンが多かったが、調査によると、日本人男性の子育て参加意識は高まっているものの、実際の行動までには至っていないという。

父親の子育て参加を増やすには、男性の育児休暇の容易な取得などの制度的整備も必要だが、筆者は結婚前の研修が有効であると考えている。今日の若者は、結婚した後、どのように家庭生活を過ごせばいいのかについての学習をする機会がない。様々な知識の習得も大事だが、結婚生活の学習も学校プログラムの中に組み込むべきだと考える。

たとえば中高生であれば家庭科の中に配置できる。大学生であれば、家庭社会学のような科目を設置し必修とする。

社会人に対して筆者はかねてから、役所への婚姻届の際、「幸福な結婚について」などのよ

うな研修を行い、その後に結婚報酬金を支給すれば、家庭を原因とする社会問題が減少するのではないかと考えている。

そこでは夫婦の会話の必要性、父母の役割、子どもに関する福祉制度（医療・保育等）、学校制度についてなどの概要を説明し、公的・私的支援体制も併せて紹介すると緊急時に役に立つ。

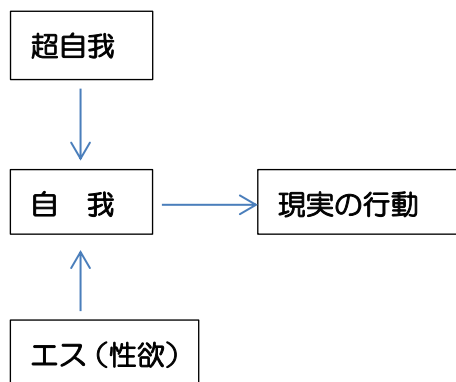
話題が現実への応用に展開してしまっただが、もう一度理論に戻せば、受容的父母役割によってアタッチメントを形成した子どもは、やがて自我が芽生える。次の発達段階としてフロイトはそこで超自我が子どもを社会的ルールに従わせると指摘したが、超自我は、「罪に対する罰」を与える役とのイメージが強いように思われる（図2フロイトの心の構造論参照）。

その理由に関して考察すると、日本におけるフロイト研究の大家である精神科医の小此木啓吾は次のように述べる。「フロイトの思想は、父性優位の思想である。フロイトは、人類はかつて母権制であったが、やがては父権制の段階に進歩したと言う。この母性から父性への進歩こそ、知的優位のフロイト思想の拠り所である」。

ここにはキリスト教でも特にプロテスタントの思想の影響を強く見ることができる。つまり、「三位一体の神」の各位としての「神」、「御子」、「聖霊」をすべて男性格とし、女性性をまったくそぎ落とした男性優位の神観＝世界観が反映していると思われるのである。これがカトリックであれば、マリアを聖母として位置付け、女性性を一応保持してはいるが、プロテスタントはマリアを単なる女性としか見ない。そのため男性優位の世界観となってしまった。

またフロイトはモーセに関する論文（「モーセ像」「モーセという男と一神教」）も書いている。これはフロイトがモーセを理想の父親像と見ているものであると小此木は指摘する。イタリアにあるミケランジェロのモーセ像は通常、イスラエルの民の不信仰に怒って十戒の石版を割るモーセ像とされるが、これをフロイトは、その怒りと闘い、それを乗り越えたモーセであると再解釈したとも指摘する。

<図1：フロイトの心の構造>



しかしながら、罪を犯しがちな自我（エスが常にコントロールしようとするため）に対

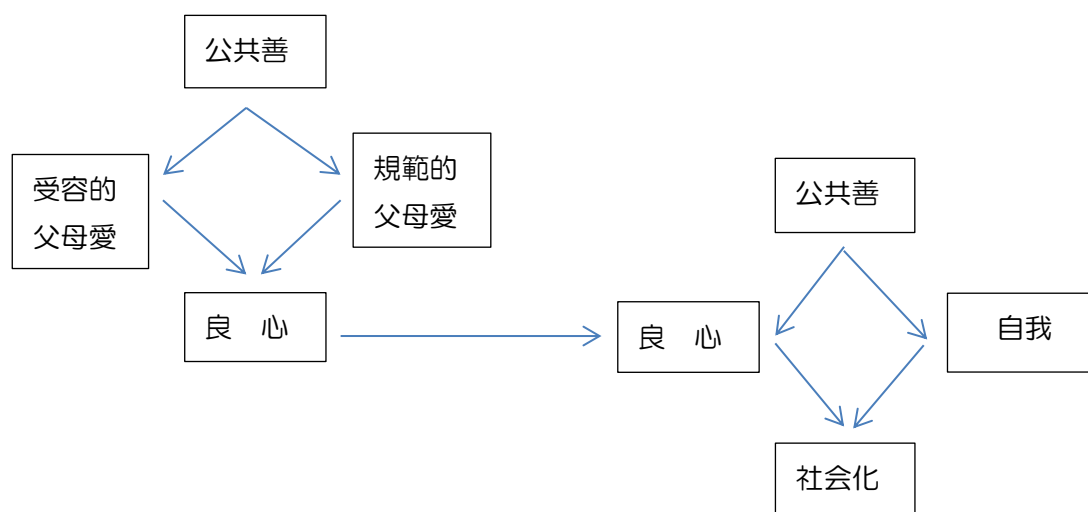
し、超自我はモーセのように厳しく怒り、自我の方向性を正すようなイメージが残存しているのではないかと思われるのである。

旧約聖書の出エジプト記を見れば、度々不信仰を犯すイスラエルの民に対して怒るモーセの姿がある。ついにはその怒りによって神から授かった十戒が記された石版まで叩き割ってしまうほどであった。超自我にはそうしたモーセの怒りが背景にあるように感じられる。

しかしフロイトは臨床の現場から、超自我が強すぎて神経症になる患者を診てきた。そのため、超自我とエス、あるいは超自我と自我とのバランスこそ精神的安定のもとであるとは述べている。

一方、父母的役割論では超自我の役割を果たすものを「良心」とする。良心はフロイトにおいて超自我と同義であった。しかしその問題点はすでに触れた。精神分析理論のほかには良心の形成に関して行動主義（賞罰によるオペラント条件付けによる）、社会学習理論（大人などを模倣するモデリングによって）、認知発達理論（役割取得などの発達による）などがあるが、父母的役割論において良心はどのようになっているのであろうか。図示すると<図3・良心について>のようである。

図2：良心について



「良心」は「規範的父母の愛」と「受容的父母の愛」が子どもにおいて内面化された合成品である。双方の愛は、公共善を軸にした相互作用によって子どもに注がれる。公共善とは、人類に普遍的な善を志向する価値であるが、この場合、父母の愛情はまったくの利他的なものと考えられる。近年、主張される、将来的なリターンを想定する互惠的利他主義と比較すれば、見返りを求めないという意味において、古典的な利他主義といえるだろう。親の子に対する無制限の愛情は、孔子（B. C. 500年前後）以来の徳目である。

子どもの心に育った良心は、両親に替わって子どもを導く。特に思春期にでもなれば四

六時中親が子どもを「監視」するわけには行かない。子どもは自分で善悪を判断し、自立的に望ましい行動を取らなければならない。その際に子どもを内心から導くものが良心である。

良心が働きかける対象は、利己主義 (egotism) であろう。他人の幸福よりも自己のそれを優先する、時に他人を利用して自己の幸福を実現しようとする利己主義は様々なレベルで顔をのぞかせる。アブラハム・マズロー (Abraham Harold Maslow、1908年-1970年) が指摘する生理的欲求のレベルから安全、所属と愛情、はては承認の欲求のレベルでも他人を利用して自己に有利をもたらそうとする。さすがに自己実現のレベルでは利己主義の発現はないものと思われる。

良心の形成について我々が子どもを指導する現実的な場面を思い浮かべてみよう。望ましい形は両親のうちどちらかが叱り、どちらかは宥める。そのコンビネーションが絶妙であればあるほど、子どもは素直に両親の指導を受け入れるだろう。

おそらく子どもは、叱られたことによるよりも宥められたことによって指導を受け入れている。子どもが社会的ルールに従うようになることが実際には、フロイトの言うように父親だけの役割ではなく、父母の協働によるものとなっているのではないかというのが筆者の実感でもある。

両親によって良心を形成する子どもたちは、パーソンズの述べるように第一次的社会化は家庭で行われるものの、第二次社会化は良心に導かれて学校や、あるいは社会において行う。そこでは両親の手の届かない範囲であるため、自律的な社会化を進行させざるを得ない。それは子どもたちが責任 (道徳的行為を行う) を果たすことを通じて行われるため「自立的社会化」とでも呼ぶべき領域である。

思春期になれば子どもは親からの干渉を疎んじることが多いため、第二次的社会化は自律的に行われるべきであろう。そうすれば余分な親子の葛藤は生じない。そのためには第一次的社会化の段階で十分に機能する良心を形成しておくことが重要である。

6 最後に

最後に父母的役割論を存在論的に考えてみる。ここでもフェミニストの影響が反映されることになる。つまり 1960年代にアメリカを中心に広がったフェミニズト神学は、神が男性格であることが女性差別の根源であると主張した。米フェミニスト神学・哲学者のメアリー・デイリー (1928年-2010年) の「もし神が男性なら、男性が神になる」(Beyond God the Father 1973。)との名言がその代表的なものであった。

英語では歴史は history と his-story (彼の物語り) であり、her-story (彼女の物語り) とはならない。言語における女性差別の根本も聖書における神の代名詞が He と男性格名詞となっていることにあるとフェミニストらは主張した。

最初に神の戒めを破って罪を犯した (善悪知るの木の実を取って食べた) のはイブ (女

性) であることになっている。さらにパウロは「男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られた」とか、「婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語る事が許されない」などと露骨な女性差別的見解を述べている。時代的な制約のなかにあったのかもしれないが、パウロは基本的に女性を男性の劣位に置いていた(別の場面ではやや男女平等的な発言も行っている)。

フェミニスト神学は結局、神の代名詞を He/She とするよう主張した。それを受けて、「天にいます私たちの父よ」との慣用句を、Our Father-Mother in heaven (天にいます私たちの父母よ) と訳する聖書も登場することになった。

神の似姿として創造された世界に男性と女性が存在し、雄と雌が生存する。すると神も男性相と女性相の総合的な存在であろうと推測してもなんら非合理的ではない。プラトンの両性具有論 (androgen) を全く支持するわけではないが、天上の存在が男女の統一体であったという指摘は極めて示唆的であると考えられる。

こうした視点に立てば、父役割・母役割が父母役割になることが自然の流れと捉えられよう。

<図3-子どもの社会化概念図>

